
運命の「あけまして、おめでとう」

小湊茉莉絵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

運命の「あけまして、おめでとう」

【Nコード】

N0776BA

【作者名】

小渕茉莉絵

【あらすじ】

本編と離れた短編です。

流星と朱音の出会いと、「実はこんな意味でつけたのよ」という、小渕の命名秘話まで（笑）

ちなみに。 1（前書き）

本編には絡まない……はず（おい）
2012年も、よろしくです。

ちなみに。 1

「流星、今日から貴方の側近になる、朱音よ。」

1月。大学卒業式を一族で行った後、母・恵知に紹介された女性、土屋朱音。

噂に聞いてはいた。某有名大学を首席で卒業、しかもその美貌でミスキャンパスに推薦で輝いたという。そこそこ有力な分家の出だ。

「よろしくお願いいたします、流星さま。」

「……ヨロシク。」

思った以上にタイプだ。

「では流星。私は、今作っている朱音の部屋に行くわ。次期当主の側近なもの。豪華にしくちゃ。」

「え、母さん、俺たちはどうすれば……」

恵知は、ニヤリと笑う。

朱音がちんぷんかんぷんといった感じで、お願いします、と言つと、恵知は流星を自分の傍に寄せつけて、耳打ち。

「朱音を射止めなさい、流星。あんな出来た女、そうそういるもんじゃないわ。健太郎より、差ができる。」

「母さん、俺は……」

「はいはい、行きますよ、皆さん。」

「はい、奥様。」

母親が、自分をどう見ているかは知っている。

それを加味したうえで、この行動には不満を覚えた。

健太郎はともかくとして、朱音と言うこの女性がかわいそうだ。

「ええつと……」

「朱音、で構いません。」

「じゃあ、朱音。」

2人きりになつて、どうしたらいいのやら。

時期は少し遅れてるが、とりあえず、浮かんだ言葉を口にする。

「あ、あけましておめでとつ……」

「はい、流星さま。」

機械のような彼女。

少し間があつて、会話を続けたい流星は、ポン、と浮かんだ自分の頭をほめてやりたくなつた。

「朱音は、どうしてアカネっていうんだ？」

「私の、名前でございますか？」

「ああ。」

「……母に聞いたところですが……私が産まれたとき。父が外を見ると、丁度日の出だったらしいです。その色があまりにも美しく、色の赤を入れようとしたとか。」

「へえ。」

「でも、赤、じゃなんだかしっくりこない。だから朱色の朱にした。そして、私の産声が大きかったらしく、この音のように健康……ということで、“朱音”と。少し……かっこよすぎですね。」

ほほ笑む朱音。

彼女は決して機械ではない。

横暴な自分の母に、操作されてるだけなのだ。そうしなければ生きていけない一族なのは、頭のよろしい彼女は分かっているはずだから。

「流星様は……私と逆ですね。」

「知ってんの？」

「勿論です。深夜、流星群が訪れた時にお生まれになった。闇夜を開く明るい星星。流星様。」

「はは、俺たちは真逆だな。」

「はい……でも……似ています。」

「そうだな。」

「朱音。お部屋の準備ができましたよ。」

「はい、奥様。」

去っていく朱音。

そんな彼女を目で追う流星。

運命は、決まっていたのかもしれない。
幸福か、残酷かどうかは別にして。

「あけましておめでとございます。これからよろしく願います。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0776ba/>

運命の「あけまして、おめでとう」

2012年1月1日21時50分発行